

# まちに“小さな主人公”が 育つしかけとは？

## NPO インターンシップラボシンポジウム2019報告書



**NPO インターンシップラボ**

<http://nointernship-lab.net/>

<https://www.facebook.com/nointernlabo/>



〒231-0023

横浜市中区山下町 94 番地 横浜中華街パーキング協同組合内

TEL&FAX : 045-662-4395 メール : [info@actionport-yokohama.org](mailto:info@actionport-yokohama.org)

ホームページ : <http://actionport-yokohama.org/>

発行: 2020年1月

企画・編集: 奥田裕之、高城芳之

デザイン: 秋本創

作成協力: NPO インターンシップラボメンバー、シンポジウム登壇者の皆様

**日時: 9月 16 日 (月・祝) 13:00~17:00**

**場所: 青山学院大学 青山キャンパス 17号館 17306 教室**

**共 催 NPO インターンシップラボシンポジウム実行委員会**



**NPO インターンシップラボ実行委員会 メンバー**

芦澤弘子 (聖学院大学ボランティア活動支援センター) / 今井迪代 (NPO 法人まつど NPO 協議会) /

大木本舞 (とちぎコミュニティ基金) / 熊谷紀良 (東京ボランティア・市民活動センター) /

直井友樹 (NPO 法人 NICE) / 西尾愛 (認定 NPO 法人藤沢市民活動推進機構) /

野地理恵子 (NPO 法人ふくしま NPO ネットワークセンター) / 高城芳之・秋本創 (NPO 法人アクションポート横浜)

**青山学院大学サービス・ラーニング パイロットプロジェクト**

**助 成 公益財団法人トヨタ財団**

## はじめに

私たち NPO インターンシップラボは各地域で NPO インターンシッププログラムを運営する中間支援組織のコーディネーターが集まって結成しました。2018 年からスタートし、シンポジウムや勉強会などの発信と交流の機会や白書づくりといった調査活動などを通じて、NPO インターンシップの意義や価値について議論をしています。

本シンポジウムはその一環として、4 月から実行委員会を開催し、私たちが全国のコーディネーターのみなさんとともに議論したい内容を考え「まちに、『小さな主人公』が育つ仕掛けとは？」をテーマとしました。

NPO の役割の一つは社会課題の解決と価値の創造と言われていますが、そもそも社会課題の解決は企業や行政も本来的に目指しているものです。では、NPO の役割は何なのか。それは「参加の力」で社会に関わることだと思います。

一人ひとりの力は小さいけど、たくさんの人が参加することで大きな力を生み出すこと、地域や社会で役割を發揮することが一人ひとりの喜びにつながること。そのための仕組みを作り人を育てることが NPO の役割なのではないかと思います。今回のテーマである“小さな主人公”こそまさに私たち NPO が育て、巻き込んでいきたい仲間たちになるのではないでしょうか。

そして、その人材育成の仕組みの一つに NPO インターンシッププログラムがあるのではないでしょうか。こうした議論をみなさんと重ねていきたいと思い、開催に至りました。

本報告書はそのシンポジウムの記録をまとめたものです。NPO インターンシップを始め、地域に若者が入っていく取り組みに関わる皆様の活動の参考となれば幸いです。

## NPO インターンシップ とは？

主に大学生・専門学生・高校生が NPO で一定期間インターンシップ（就業体験）をするプログラムです。運営主体や実施期間などは様々あります。本事業ではその中でも企業インターンシップのような就業目的ではなく、学生が地域や NPO を学び、社会参加するきっかけ作りとして行われているプログラムを対象としています。



## まちに“小さな主人公”が育つしかけとは? ～NPO インターンシップラボシンポジウム 2019～

### <報告会概要>

日時：9月 16 日（月・祝）13:00～17:00

場所：青山学院大学 青山キャンパス 17号館 17306 教室

参加者：67 名

（中間支援 NPO:10 人、NPO:9 人、行政:4 人、企業・財団関係者:1 人、

大学：6 人、学生：4 人、スタッフ・ゲスト：33 名）

13:00- オープニング

13:10- パネルディスカッション①

「小さな主人公を育てる実践者が語る未来」

14:40- 休憩

14:55- パネルディスカッション②

「学生が変わる？！地域が変わる？！」

～NPO インターンシップ徹底解剖～

16:15- まとめ・シェアタイム

16:30- 交流会

17:00- 閉会



## NPO インターンシップラボについて 今井迪代さん (NPO 法人まつど NPO 協議会コーディネーター)

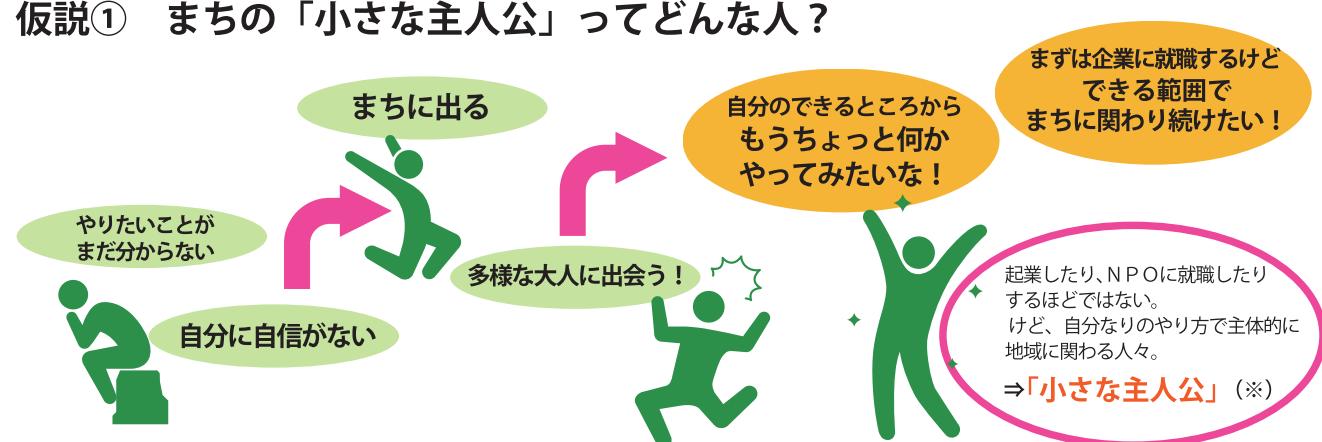
NPO インターンシップラボの対象はプログラム名に「インターンシップ」という言葉を使わなくても、若者が地域に入って活躍する仕組みを指しています。インターンシップはひとつの手段です。中間支援機関がそれぞれの地域で NPO と学生をうまくマッチングできる仕組みを作るために活動しています。

そのためにシンポジウムだけではなく、白書づくりや勉強会、さらには新しくプログラムを立ち上げたいという人向けの伴走支援なども行っています。

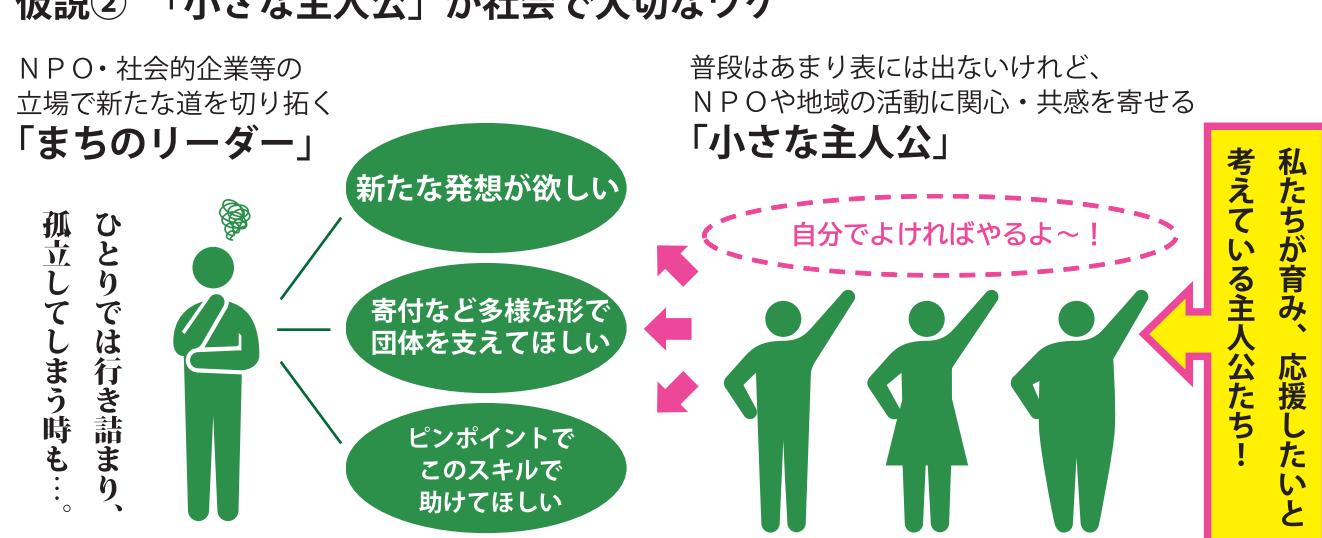
今回のテーマとなっている「小さな主人公」です。それがどんな人たちなのか、私たちもきちんと定義できているわけではありません。リーダーを育てる仕組みはいろいろありますが、リーダーはひとりだと孤立してしまいます。普段はあまり表に出ないけれど、NPO に参加することでリーダーを支えて地域を盛り上げていける若者の存在が必要になります。

「まだやりたいことがわからない」「自分に自信がない」という普通の若者が地域に出ることで、そのような、いわゆる「フォロワー層」になるのではないかと考えています。そういう人たちが地域の活動に参画してもらうにはどのような仕組みが必要なのか、それを今日は皆さんと考えていきたいと思います。

### 仮説① まちの「小さな主人公」ってどんな人？



### 仮説② 「小さな主人公」が社会で大切なワケ



## パネルディスカッション①

# 小さな主人公を育てる実践者が語る未来

「小さな主人公」を育てる実践に様々な立場・角度で取り組んでいる方々に話を聞きます。「小さな主人公」とはどういった存在なのか、そうした人が育まれる環境やしかけのポイントは何か、考えます。

## ■ 進行

### 神奈川大学 特任准教授 山岡 義卓さん



千葉大学理学部卒業、食品メーカーを経た後、法政大学大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻修了。大学の地域連携活動のコーディネーターを経て 2013 年 4 月より現職。インターンシップや地域連携によるプロジェクト型授業など体験型キャリア形成科目を主に担当。アクションポート横浜理事。

## ■ 登壇者

### 青山学院大学ボランティアセンター 秋元みどりさん



大学卒業後、児童養護施設職員として勤務するなかで、虐待を受けた子どもの自立を支えるボランティア・市民活動がもつ力に关心が高まる。フィリピン大学にてコミュニティディベロップメント修士課程修了。大学・短期大学でのボランティアセンターコーディネーター、サービス・ラーニング科目講師を経て 2018 年より青山学院大学でのサービス・ラーニングパイロットプロジェクトを担当。

### NPO 法人寺子屋プロジェクト代表 荒木 勇輝さん



NPO 法人寺子屋プロジェクト代表。1984 年京都府生まれ。大学卒業後は新聞記者として 5 年間、企業・大学・行政などの取材を担当する。以前から関心のあった教育事業を始めたいという想いから退職し、2014 年に NPO 法人寺子屋プロジェクトを設立。実際のお寺を会場とした現代の寺子屋「Teraschool」の運営や、全国各地で新たに子育て / 教育の場を創出しようとする人たちをサポートする開設支援を行っている。

### NPO 法人トチギ環境未来基地 大木本 舞さん



北海道生まれ。大学 4 年から NPO 法人トチギ環境未来基地の立ち上げに関わり、2019 年 3 月まで事務局長を務める。在職中の 2013 年～2014 年、トチギ環境未来基地がモデルとなったアメリカの NPO、EarthCorps で環境保全活動 × リーダーシップ育成のノウハウを学ぶ。現在はとちぎコミュニティ基金で、助成金型の学生インターンシップの運営を行い、インターンシップラボの一員でもある。

**山岡さん**：小さな主人公を育てる実践者が語る未来というテーマですが、そもそも「小さな主人公」が分かりにくいテーマです。「小さな主人公」がいるのであれば、対比して「大きな主人公」がいるということです。「大きな主人公」とはNPOの代表やコアメンバーなどでしょうか。それに対して「小さな主人公」は、中心的ではないが市民活動やNPOの活動にボランティアやパートタイムとしてお手伝いをする人たち、いつかかわるかもしれないと思いながらセミナーに参加する人などを指すのではないかでしょうか。**リーダーが出てくればフォロワーも出てきますので、リーダー層を育てるということも大事ですが、ダイレクトにフォロワー層を育てるということも大事だと私たちは考えます。**実際のNPOの活動はこうしたフォロワー層に支えられています。調査によるとボランティアに関心はあるが、実際にしたことがない人は約3割います。ここを埋めていくのはリーダー層ではなくフォロワー層だと言えます。

現在、NPOやボランティアに関するさまざまな取り組みが行われており、関心がある人は増えていると思われがちですが、データから見るとボランティアをしている人は増えていません。他方でボランティアが全くないというNPOも2割以上あります。市民社会を作っていく回路のひとつとしてNPOがありますが、そのNPOの役割が機能していないということはとても大きな問題です。**市民社会を形作っていくためには「小さな主人公」を育てる必要**ではないでしょうか。



山岡さん

#### <パネリストの自己紹介と活動の紹介>

**大木本さん**：私はトチギ環境未来基地というNPO法人で働いていました。日本は国土面積の70%が森林で、栃木県も55%が森林です。トチギ環境未来基地もこの森林をどう守っていく

かをテーマに活動をしています。団体を立ち上げたきっかけは代表の塙本さんがアメリカで**20年前にアメリコ（AmeriCorps）というプログラムに参加したこと**でした。アメリコは国のお金を使って1年に渡り各地域で若者が活動します。その中のひとつであるシアトルのアースコーでは、アメリカだけでなく各国から若者が参加して、国立公園の整備や外来種の駆除、植林などの環境保全活動を行っています。

**アメリコは国のお金を使って若者の育成と就労の場を提供しています。**日本にはなかなかないシステムで、今までに年間75,000人が参加しています。ボランティアではなく有償で、生活手当ができるだけでなく、奨学金の返済も受けられます。若者が社会の一員として実践的に学べる場です。参加者はその後大学院に戻る、もしくは環境保全の仕事につくなど、**プログラムを使ってキャリアアップ**することもできます。このようなプログラムを栃木に作ろうと思ってトチギ環境未来基地の活動は始まりました。

栃木では3ヶ月という期間を決めて、春と秋の2回に分けてプログラムを行っています。日本人だけでなく外国人も参加し、一緒に自炊して、森に入って実践的な環境活動を行います。今まで10年間で73人が参加し、6人が栃木に移住、23人がNPOに就職しました。

**この活動にかかわる人たちが環境のことはどう感じ、それをどう活かしていくか。それを考える時間をプログラムの中に取り入れて、いろいろなことを持ち帰ってもらっています。**



大木本さん

**荒木さん**：私たちは**子どもと大人が学び合う寺子屋**を**寺で行う「Tera school」**という事業を行っている京都の団体です。「学び合い」「探究」「プログラミング」の3つのコースが

あり、**教師と生徒のような関係ではなく、先輩と後輩のような関係づくりをしてお互いに学び合う場づくり**をしています。また、より良い学びを実現する「現代の寺子屋」のモデルを全国に広める活動も行っています。インターンシップは大学経由などではなく、自発的に来る学生のみを対象としています。半年区切りではありませんが、随時更新をることができます。いつまでという期限をはっきりと定めています。内容は子どもたちと学び合う教室に参加、各教室や事業の運営、また開設支援の場にスタッフと一緒に行くこともあります。ボランティアが中心ですが、一部有給の業務もあり、ボランティアと有給スタッフを兼ねている場合もあります。大学何年生であっても参加でき、交通費やボランティア保険のほか、「みんなで学び合う」ために月に3,000円までの図書費も補助しています。京都市内の学生が中心ですが、大阪や神戸から来ている学生もいて、常に20人くらいの学生がいます。また、アフターファイブで参加する社会人ボランティアもいます。

**インターンを経験すると進路選択に妥協をしない学生が多く出ています。いろいろな大学や価値観の学生が集まっているだけでなく、社会人、主婦や退職したシニアボランティアもいますので、外部の人に鍛えられるようです。**地域志向やベンチャー志向の就職活動をする学生も多く、大学院に進学する人も少なくありません。子育てや教育が中心の活動なのでそういう分野に進む学生も多く、卒業生はいろいろな分野で活躍しています。

私たちは現在トヨタ財団の助成金を利用して「大学生とNPOの双方が育つモデル」について、さまざまなプログラムの独自性や共通点などを調べています。この助成金は社会的アクションのための予備調査という位置づけですので、来年度からは関西の複数のNPOと大学関係者の



荒木さん

協働の企画として、調査の成果を活かしながら、**半年くらいの長期インターンシップを設定して、学生とNPOとともに成長するインターンシップを京都にも作っていかたい**と思っています。

**秋元さん**：もともと児童養護施設の指導員で、ボランティアの受け入れ係をしていました。地域のさまざまな世代がボランティアを行い、大学のサークルが学習支援を行う中で子どもとの職員とは違うかわりかたを見て、**子どもたちを支えるのは必ずしも福祉の専門職ではない**ということを学びました。

青山学院大学では2016年にボランティアセンターを設立、また現在はサービス・ラーニングとして、大学の科目の中でも学生が市民活動とつながっていくことができる取組を始めています。

サービス・ラーニングは学生が地域の中にあるさまざまなニーズを知り、何ができるかを考え、行動につなげていく学びです。**特徴的なのは「大学での学び」を活かした形で社会参画していくことです。**活動を通して自分の学問的関心に発展させていくだけでなく、学生を受け入れる地域にとても気づきがあり、ともに市民社会を形成していくことができるのではないかと思います。

本学のサービス・ラーニングでは**「サーバントリーダーシップの育成」**を大事にしています。**サーバントリーダーシップは従来の強い権力者のリーダーシップから、人に奉仕し耳を傾けていく中で、世の中で何が求められていて自分になにができるのか、そしてそこから社会を導いていくビジョンを示す、新しいタイプのリーダーシップです。**

本年度のサービス・ラーニング科目は一般教養の中にあ



秋元さん

るキャリア形成の選択科目として、相模原キャンパスで24名の受講生で開催しました。実習先は横浜と相模原のあわせて7つの市民活動団体で、アクションポート横浜が中間支援としてコーディネートに入りました。

終了後のアンケートではNPO側からは「自分たちの社会的ミッションを共有できた」という回答が寄せられました。そして学生からは「NPOと一緒に活動することによって、考え方や生き方、価値観に影響を受け、自分の今度のキャリアを考えるようになった」という意見が出ており、「市民活動に初めて触れたが、今後も活動してみたい。別の活動も見てみたい」という継続的に関わりたいという人がほぼ100%でした。その半面で「もっと活動時間を増やしてほしい」という回答もあり、学びと活動のバランスの難しさを実感しました。



#### <質問・感想の共有>

##### ・大木本さんから荒木さんへ

**大木本さん**：荒木さんにお聞きしたいのですが、子どもと大人が学び合うという言葉がいいなと思いましたが、地域とのかかわりはどういうことがありますか？

**荒木さん**：NPOなのでそもそも地域にステークホルダーはたくさんあり、私たちはマルチステークホルダー大事にしています。あとは社会資本としてのお寺に着目して使わせてもらっていますが、お寺は地域と密接にかかわっています。しかし私たちがお寺の周りの地域とつながれているかというと、そこは個別性が大きいので、つながりを増やしていくことは今後の課題です。

##### ・荒木さんから秋元さんへ

**荒木さん**：学生サイドからのアンケートの結果をどう捉えていますか？また、それをより高めていくためにはどういった要素が必要でしょうか？

**秋元さん**：大学の授業の一環で取り扱えたということはきっかけとして大きな意味があります。ボランティアセンターに来るというのはハードルが高いと感じる学生もいますが、そういう学生にとっても授業があれば先生と一緒に地域や社会につながることができます。しかし、実際にサービス・ラーニングを受講した学生は、すでに活動をしている学生が多かったのも事実です。多様な関心や経験の差がある学生に、どのようなサービス・ラーニングを展開していくのかは今後も模索していきたいです。

**荒木さん**：他の大学で参考になっている事例はありますか？

**秋元さん**：国際基督教大学では日本の学生と海外の学生が一緒に日本の方に行つて高齢者から戦争体験を聞いて記録するというような活動を行っています。そのような国際的なサービス・ラーニングは興味深いです。

##### ・秋元さんから大木本さんへ

**秋元さん**：外国の若者は目的意識や文化の違いがあると思いますが、それはどうやって克服していますか？

**大木本さん**：朝、活動が始まるときは、一緒に活動する人たちで自己紹介をしてから始まります。例えば、前回はロシア、フィリピンからのメンバーがいました。コミュニケーションの架け橋を日本人職員、メンバーが行います。まずはお互いを知ることが大事なので、休憩中もお互い話せる場を作るという工夫をしています。



##### ・山岡先生から皆さんへ

**山岡さん**：「小さな主人公」を育てるということをどのように意識されていますか？

**大木本さん**：私自身がシアトルのプログラムに1年間参加していましたが、そこで「現地の人人がどう生活して

いるか」「人種が違う人がどのように会話をするか」ということを体系的に学べたのが大きかったです。いかに自分事として考え、動ける人になるか。時間があるときにボランティアをする、お金があるときには寄付をするというようなことができる人が自然に増えていくことが大事です。シアトルのプログラムでは「学ぶ場」と言って週に1回ほど学習できる日を作っています。ただ労働するだけでなく、体験だけもなく、「学習する」ことを合わせて実施することが大切だと考えています。

**荒木さん**：最初にこのシンポジウムのテーマを見たときに難しいなと感じました。ドッカーライフに「非常利組織の成果は変革された人の人生である」というものがあります。まちのリーダーに対してフォロワーである「小さな主人公たち」を増やしていくことが大事という話につながるのではないかでしょうか。あまり活発でない学生からフォロワーになる人がいて、そこからサーバントリーダーになる人がいて、中には世界的なリーダーになっていく人もいます。等身大の自己実現として社会参加していく中で、小さな主人公をゴールととらえずに、変化の過程でどちらでもいいのではないかでしょうか。

そしてそのためにも日々の活動とは少し離れて俯瞰することができる内省の機会、例えば面談のようなフィードバックや対話の場が用意されているといのかなと思っています。NPOがインターンを受け入れる場合もそういう場が必要ではないでしょうか。

**秋元さん**：フェアトレードをする団体で活動する学生が団体の人から「ジンジャーティーをどう売ればいいか」という相談を受けたことから、ジンジャーエールを作って「ジンジャーを飲んでエールを送ろう」とい



うアイディアが生まれ、その後試行錯誤を重ねて、それを学園祭などのイベントで販売するということになりました。

また別のところでは、就職活動をしている学生が国際協力への道を諦めきれず、NGOのスタッフにキャリアの相談をしたりしています。今回24人の学生が参加しましたが、うち6名が終了後も何らかの形で関わっていますが、こうした事例が「小さな主人公」なのではないかと思いました。

#### <活動を進める上の課題>

**山岡さん**：活動を進める中でいろいろな課題や困難があつたと思いますが、それをどのように乗り越えてきましたか？

**大木本さん**：課題はたくさんありますが、ひとつは資金をどう確保するかということです。アメリカのように国の補助があればやりやすいと思いますが、なかなかそうはいきません。森林整備の作業委託費でも運営できるだけの財源にはならないのが現状です。資金調達のためには、どのように伝えて、共感を広げて、仲間を増やしていくかが課題となります。もうひとつは、常にいろいろな若者が来ますが、活動は同じ質で続けていかないといけないということです。安全面など含めて、ある程度仕組みにすることが必要なのではないかと考えています。

**荒木さん**：活動を始めて2年目くらい、大学生のスタッフが20名を超えたあたりから進路の相談などの活動外の支援をするのが難しくなってきました。そのような現状があったために大学生からの提案があって「スタッフサポート」というチームができて、そのリーダーも大学生がやることになりました。そのチームで相互



支援しあうようになり、スタッフの負担も減り、さらに風通しもよくなりました。寺子屋は最初から学生と一緒にやることを前提しているので受け入れ体制がありますが、団体によっては受け入れ体制を整備することからスタートする団体もあります。受け入れの方法やノウハウについて、大学や中間支援組織から支援があるといいのではないうえであります。

**秋元さん**：大学の中にボランティアセンターという大学と社会とつなぐ機能があるので、センターがサービス・ラーニングの授業と一緒に作るということが実現できました。またアクションポート横浜の中間支援があつたことで、学生を育てることに関心の高い団体と協働することができました。大学が社会にどういうふうに貢献していくかという話はされていますが、**個々の教員だけではなく、大学組織全体でどのように推進していくかを話していく必要がある**のではないかと思います。



**山岡さん**：大学が中間支援とつながるこうした授業を実現できたということは、逆の視点からいうと、**大学のボランティアセンターとつながったことで団体側も学生を受け入れることができたという側面もある**のではないかでしょうか。資金の問題やいかに仕組みを作るか、さらには活動以外のサポートや学外組織との連携という多様な課題が出てきましたが、それらをさらに進めていくためにどのようなことが必要だと考えますか？

**秋元さん**：今回、プログラムの実施にあたって地域の団体とディスカッションしました。そこで学生に対していろいろな期待があるということも分かりました。しかし、その期待に応えるためだけに学生が行くというわけではありません。団体にとってではなく、学生にとってどうなのかという視点が必要になります。日

本での大学の進学率が50%を超える中で、奨学金を借りて大学に通う学生が当たり前のようにいます。もしかしたら**学生自身も社会課題の当事者かもしれません。市民活動とつながることで自分が感じている生きづらさは社会課題かもしれない気づき、社会を変えていく主体になるかもしれない**、そういうことも意識しながら、学生を後押ししたりという視点も必要になると考えています。

**荒木さん**：私たちの調査はまだ途中ですが、現時点で明らかになっていることとして、「**主体的に動ける環境」「大学ではない出会えない人との出会い」「キャリアに役に立つ**」というのが**学生の感じている評価点**です。NPO側は未来を創る人材を預かっているという感覚を持ち、NPO・大学・中間支援が密にコミュニケーションをとっていくことが必要です。

**大木本さん**：**何をするために、どういう人が必要かという視点**も大事です。宇都宮で「子ども食堂キャラバン」という取り組みを行っており、子ども食堂を福祉施設で一日ずつやってみて、そこにインターンシップで学生が関わっている事例があります。ある目的に沿って、いろいろな人たちがかかわる場を設計していくといいのではないかと考えます。

**山岡さん**：「つながり」がキーワードになっていると感じました。秋元さんの話では「中間支援とNPOと大学がつながる」。荒木さんの話では「大学生同士がつながっている」など。そういう意味でインターンシップラボもつながりを生み出す場です。それがこの場の持つひとつの意味なのではないでしょうか。



## パネルディスカッション②

# 学生が変わる？！地域が変わる？！ ～NPO インターンシップ徹底解剖～

## ■進行

### 聖学院大学 コミュニティーサービスラーニング講師 川田虎男さん

1980年生まれ。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了・社会福祉士。大学卒業後社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会勤務。27歳から日高市議会議員を1期4年務める。その後、NPO法人ハンズオン埼玉へ。事務局長を経て現在代表理事。聖学院大学非常勤講師（ボランティア論・コミュニティサービスラーニング）、同大ボランティア活動支援センターアドバイザー、立教大学大学院博士後期課程在籍。



## ■登壇者

### NPO 法人アクションポート横浜 代表理事 高城芳之さん

1982年生まれ。大学時代から「若者と地域をつなぐ場づくり」をテーマに活動をはじめ、新卒でNPOの世界に飛び込む。当法人では学生のボランティアマネジメントを始め、企業のCSR相談事業、プロボノ支援事業などを企画運営してきた。認定NPO法人CFFジャパン理事、NPO法人くみんネットワークとつか理事、明治学院大学社会学部非常勤講師など。



### NPO 法人びーのびーのスタッフ 館裕香さん

おやこの広場びーのびーの（横浜市補助事業 親と子のつどいの広場事業）事業代表責任者。1977年生まれ。横浜市港北区生まれ港北区育ち。好きな野球チームはもちろんベイスターズ。2004年に母となり、びーのびーのに毎日のように通っていたら、気付いたらスタッフに、そして今は責任者。



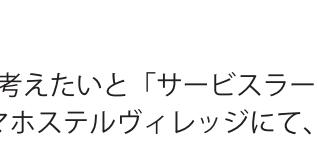
## ■NPO インターンシップ体験者

### 荒木優里奈さん

大学3年生だった2017年7月から認定NPO法人アークシップで長期インターンに参加し、広報活動を行う。2018年度からサポートスタッフとしてアークシップに関わりながら、現在は横浜市内の就労継続支援施設で支援員として働いている。

### 青山学院大学 地球社会共生学部3年 嶋田美幸希さん

東北や熊本で震災ボランティアを経験し、ボランティアの向き合い方を考えたいと「サービスラーニングとしてのボランティア活動」を履修。コトラボ合同会社のヨコハマホステルヴィレッジにて、短期インターンシップに取り組む。昨年タイに留学。



これまで約600人の学生たちを地域に送り出しているNPO法人アクションポート横浜のインターンシッププログラムを事例に、まちに小さな主人公が育つ仕組みを時間が許す限りで徹底解剖します。そして、参加学生と受け入れた地域側のホンネにも迫ります。

**川田さん：**後半のパネルディスカッションでは、より具体的に学生や受け入れ側はどのような感じているのか、さらに中間支援組織はどんな仕掛けをしていくのか、これからインターンシッププログラムを進めていきたいという人にも共有できるといいと考えています。最初にアクションポートのプログラムの説明を高城さんにお話いただきたいと思います。



川田さん

## ＜横浜のプログラムの紹介＞

**高城さん**：横浜のNPOインターンシップは10日間の短期プログラムと3か月から6か月のプロジェクト型である長期プログラムで募集します。プログラムは一般的なインターンシップのものと同じで、説明会や研修会を行い、お見合い会や面接を行ってマッチングをし、8月9月の夏休みを中心にインターンシップを行います。そして短期だと10月に、長期だと3月に報告会があります。毎年学生は70人くらい、そのうち10人くらいが長期インターンシップです。短期は横浜市内の10大学と連携をしていて、いわゆる単位認定になる授業の一環で参加するプログラムになっています。私たちのインターンシッププログラムの特徴は「まぜこぜ」でインターンすることです。団体も福祉分野や環境分野などさまざまで、学生もいろいろな大学の学生が参加しています。こうした地域の多様なプレイヤーが一緒になって実施するプログラムは地域の中間支援組織がからできることだと思います。

## ＜インターン経験者からのコメント＞

**川田さん：**インターンシップを行ったおふたりはどのような団体でどのような活動を行い、それによってどのような

うな変化がありましたか？

**荒木さん**：2年前にNPO法人アーカシップでインターンを行い、現在、就労継続支援施設で支援員をしています。また現在もアーカシップでサポートスタッフをしています。

アークシップでのインターンは「ホッチポッちミュージックフェスティバル」という音楽イベントの広報をすることでした。広報はふたつ目的がありました。ひとつは4万人の集客を目指すということ、そしてもうひとつは幼稚園や保育園にワークショップを届けるということでした。

当時、大学では保育学科で保育の勉強をしていましたが、当然保育学科なので保育の勉強しかなく、このまま社会に出ていいものかと考えて先輩に相談したのがきっかけで、NPO インターンシッププログラムに参加することになりました。参加するにあたっては、とにかく福祉から一番遠い組織ということでアークシップを選びました。

積極的で気遣いができるインターン生に囲まれて、自分にはどんな役割が果たせるのかと悩んだ時もありました。そんなあるとき、ワークショップ用の太鼓を見て「子どもには重い」と思って、より小さなものを作ったらどうかと提案し、採用されました。さらに「子どもの前でレクチャーするのが上手だね」とも言われました。**保育以外の分野でインターンをしようと思っていたのに、保育の勉強をしたことが役に立ちました。**その経験から学んだことは適材適所で活かされて、無駄になることはないのだなど分かりました。そのように**インターンを通して自分の自信につながっていきました。**

**川田さん：**そこで変わったということが、その後の自分のキャリアにどう影響しましたか？

**荒木さん：**現在は保育以外の仕事をしています。保育園の実習で子どもの声にたいして苦手意識を持つてしまい、



荒木さん

企業なども視野に入れて就職活動をしていましたが、アークシップの代表やスタッフに相談したところ「荒木さんは福祉が合っている」と言われ、その言葉で次の実習を頑張ってみようと思いました。その実習先が今の就職先です。その施設での学生とのかかわりかたがアークシップに似ているというのが就職の決め手になりました。

アークシップでインターンをしていて衝撃的だったのが「大学生は新しい風を入れてくれる人」と言われたことです。学生に対してちゃんと対等に受け入れてもらえているなと感じることができました。

もうひとつは、学生にはなかなか相談できる大人が周りにいませんでした。しかし、インターンを通して、アーチシップやアクションポートなど、**相談できる大人と出会うことができ、新しい視点をもらいました。**私はもともと物事をネガティブにとらえてしまうのですが、インターンを通して少しずつポジティブな自分になれたと感じています。

**嶋田さん**：被災地でのボランティア活動を経験しましたが、そういう場所では指示待ちになってしまい、ただの労働力としてのボランティアになってしまいました。今度は主体的にかかわりたいと思い、それに加えて学問としてのボランティアをきちんととらえたいと考えて、インターンシップのある授業を履修しました。

インターン先はコトラボ合同会社の寿町にあるホステルビレッジでした。寿町は日本三大ドヤ街で横浜の日雇い労働者の街であり、現在生活保護で暮らす人の多い高齢者の街でもあります。格安のユースホステルでの活動でしたが、スタッフからは「特に何も指定しないので自分たちでやりたいようにやってください」と言われました。そこで5人メンバーで話し合って活動を決め、イベント



嶋田さん

の開催と清掃、まち歩きなどの活動を行いました。それらの活動を通して、どれだけ当事者意識をもつかで行動が変わると感じました。さらに「自分で考えてやってください」と言われたことで、自分で考えて行動しなければいけない状態となり、それが意識を変えました。受け入れ先がお客様扱いしないで「やりたいことがあれば一緒にやるから」と言ってくれたこともよかったです。インターンを行うことで価値観を広めることができましたし、普段の学校生活の中では出会うことができないような人たちと出会うことができました。これから就職活動が始まる中で、ずっと同じ会社で働くなくてもいいと知ることができ、さまざまな生き方があると知ることもできました。さらに社会問題が身近に感じられ、ニュースでしか知らなかつたことに対しても「まずは自分の目で見ること」の大切さを学びました。

## ＜コーディネーターと学生の関わり＞

**川田さん：**プログラムを作る側からするとふたりの事例を聞いて参考になった一方で、単位を取りたいだけの学生の参加だったらどうなのがということに課題を感じます。中間支援としてはその問題にどのように取り組んでいますか？

**高城さん**：体験したふたりの声は実感がこもっていて響くものがあると思いました。それは本人の努力と受け入れ団体の想いによるものなので、中間支援からコメントするのはおこがましいと思いつつ、今回は機会をいただいたのでこの立場で思っていることをお話しします。

今はほとんどの学生がインターンシップをする時代で、インターンシップも身近になっています。それにたいしてボランティアをする学生は2割くらいしかいません。

「ボランティア」よりも「インターンシップ」のほうが一



高城さん

**一般的で、学生には身近なもの**となっています。またボランティアは入ったら抜けられないというようなイメージがあるので、**期間や目的の決まっているインターンシップのほうが参加しやすい**ようです。

私たちがやっている「**お見合い会**」で**学生と団体のマッチング**を仕掛けています。お見合い会では参加団体に集まってもらい、プレゼンテーションで全団体の活動を聞くことができます。例えば「子どもにかんする活動をしたい」という思いで参加している学生がいるとして、いろいろな団体の話を聞くことで環境系や国際系などの分野でも子どもが関わっているということに気づく機会になります。さらにお見合い会を通して横浜の多様な社会課題を見るともできます。そして大切なのは「顔が見える」ということです。どういう人が運営しているかが分かることで団体に参加しやすくなります。

全員で研修ができるというのがすごく大きなポイントです。ここで目標設定をしたり、プログラムの内容をお互いに共有することで刺激を受け合うことができます。また長期のインターン生は定例会というのをやっていて、学生同士が何のためにやっているのかを共有する場だったり、先輩に来てもらってメンターになってもらったりしています。**コーディネーターが教えるのではなく、学生同士が支え合い、さらに刺激しあえるような仕掛け**を研修会や定例会という場でしています。中間支援の役割は「みんなでインターンをする」場をコーディネートすることだと考えています。



#### <受入れ団体の変化>

**川田さん**：受け入れ団体側として、受け入れることで地域ではどのような変化が起こるのでしょうか？

**館さん**：私たちNPO法人びーのびーのは保育園、子育て広場、預かり保育、など多様な事業を行っています。

私はその中でもおやこの広場「びーのびー」という現場を運営しており、そこにも毎年学生インターンがやってきます。

インターン生は子どもたちと遊んでくれます。子どもたちも普段遊んでもらえないお兄さんお姉さんと遊んでもらえて喜びます。今は10人のうち7人が乳幼児に接したことがないまま親になります。そういう意味で子どもと遊ぶ体験をしてもらうのは、インターンの学生にとって大切だと考えています。

そしてそれ以上に重要な活動がお母さんと話してもらうことです。**インターンの場では学生には「何を話しても構わない」と言っています。**ある学生は「留学の予定があるが英語ができないのですが、どうしたらいいですか」という相談を広場に来ていたお母さんにしていました。そうするとひとりのお母さんが「私は英文科卒業ですが、あのときに留学すればよかったと思っています」という話を皮切りに、30分ほど学生の相談に乗りました。このお母さんこの間まで子供の首の座りが遅いと悩んでおり相談する側として来ていました。**子育てはどうしても子供が主役になってしまいますが、学生の相談がお母さんを主役にしました。**後で学生にそのことを言い「ありがとうございます」と伝えます。そうすることで学生が主体的に動いてくれるようになります。

**川田さん**：活動の中で苦労している点はありますか？

**館さん**：安全確保しながら遊ぶということは大変で、常に見守りながら遊んでもらっています。そこはとても気を使います。その中で大事なのは、まずは**私たちがその学生を好きなること**です。たくさん質問をして学生を知って、私たちが学生とフレンドリーになることで、お母さんたちも学生に対して安心して話すことができます。**学生が來ることで想像したことのない人と人の化学反応**が



生まれます。**何年か経ってふらっと遊び来てくれると近所のおばちゃんみたいでとても嬉しい気持ちになります。**確かに気は使うけれど、やめられない魅力があります。

#### <コーディネーターと団体の関わり>

**川田さん**：中間支援組織として団体にたいして気を使っていることはありますか？

**高城さん**：学生に対してと本質的には変わらないです。インターンシップは就業体験でボランティアとは違います。**学生はスタッフとして関わるので、お客様にしないようにと考えています。**企業とNPOでは受け入れ目的が決定的に違います。企業では戦力になる学生がほしいと言いますが、**社会の中で社会のために人材育成をするNPOはどんな学生でも受け入れてくれるところが多いです。**

お見合い会は団体にとってもいい機会となっています。お互いの団体を知るだけではなく、工夫して築いてきた受入れ団体としてのノウハウが共有できます。お見合い会で出会った団体どうして勉強会を開催しているところもあり、何かあつたら聞き合うことができます。

さらに団体同士だけでなく、大学と団体がつながる場としても機能しており、インターンシップ以外にも協働できるきっかけにもなります。

また、大学や受け入れ団体との協働運営ということもあります。仕組みを作り込みすぎないようにということに注意しています。またトラブルが起きると、それは中間支援としてはチャンスだと捉えます。なぜなら受け入れで問題が生じたときには一緒に解決に取り組むことで団体ときちんと向き合うことができるからです。あくまでこちらが提供するのではなく、コラボレーションするという姿勢で取り組んでいます。

#### <プログラムの課題>

**川田さん**：資金源が課題という話が前半のパネルディスカッションであったと思いますが、アクションポートではどうしていますか？

**高城さん**：まだこれだというと資金源は獲得できていませんので、運営費はいくつかのところから少しづつ入ってきます。まずは提携大学から実行委員会費、講師謝金など、さらに社会人になった卒業生も増えてきて、その人たちからの寄付金も少しづつ集まるようになってきています。学生の参加を応援しているプログラムということもあります。昨年は合計で30万円が集まりました。さらに「**インターンシップの教科書**」を開発して販売しています。



#### <会場からの質問>

Q：現在大学4年生で、話を聞いていて現在の就職活動に対する問題意識を提案しているのかなと思い、興味深かったです。荒木さんと嶋田さんに質問で、大学生ならではの視点が団体の活動に活きたということを感じた場面はありますか？

**荒木さん**：無知な状態でインターンに行くので、お客様の視点に近いと言うことがあります。団体の人に「この



チラシどう?」と聞かれ「これは何を言いたいのか分からぬです」と伝えると、「こうやってやるとどうかな?」と修正してもらえたことがありました。お客様の視点として提案することができて、それでよりよいものにしていくということで団体に役立つことができました。

**嶋田さん**：最初に見たときに、ホステルのキッチンや廊下が汚く、自分が宿泊したら使いたくないレベルでした。そこで「清掃します」と伝えたところ、あとからスタッフさんが「僕たちも見落としていたね」と言われました。また他のイベントにいったりNPOに挨拶に行ったりしたときに大学生とすることでかわいがってもらい、相手に親近感を持ってもらうこともありました。

Q：内省が重要という話がありましたが、その点についての仕組みや意識してやっているということはありますか？

**館さん**：お母さんは広場にいると子どもの話ばかりになってしまい、若い人と話すことでとてもわくわくする。どんな悩みが出てきても一生懸命考えてくれます。お母さんと一緒にスタッフで話すといつも一辺倒になってしまいますが、学生と話しているのを聞いていてお母さんが自分のことを話しているのを聞くことができます。そこでお母さんの趣味とか前職のことを知り、講座の講師をしてもらうなど、地域デビューにつながるというケースもあります。

学生にとってもコミュニケーションが上手になることで将来役に立つのではないかと思います。

**高城さん**：短期インターンシップはかなり大学の授業と連携しており、大学に事後の振り返りをしてもらっています。長期は「自分の目標設定」と「社会に対する目標設定」をしてもらいます。最初は特に「社会に対しての目標設定」が曖昧なものになっていますが、それがだんだん明確になっていきます。それを定例会で修正してもらい、最後

の報告会で自分の言葉で報告してもらいます。自分の口で説明するというところに意味があります。

### <メッセージ>

**館さん**：学生さんやっぱりかわいいです。それにつきます。皆さんには怖がらずに受け入れてほしいと思います。

**嶋田さん**：普通の大学生活だと、授業・アルバイト・サークルで終わってしまいます。インターンシップという選択肢が増えると成長できるのではないかと思います。

**荒木さん**：大学時代に大学やアルバイト以外の大人となるがれる場があることで自分も救われました。そういう場がたくさんあるといいと思います。

**高城さん**：「まぜこぜにする」というのは地域の中間支援の大重要な役割です。まちには学生がいて、志のある団体がいて、接点を作るだけでこんなに素晴らしいことがあります。いろいろな手法があっていいですが、NPO インターンシップがその可能性のひとつだと思っています。

**川田さん**：今日をきっかけに学生を受け入れたい、インターンシップの仕掛けを作りたいと思ってもらえるといいと思います。



## 事例 NPO インターンシップ プログラム

目的	NPO や地域課題に関心を持つ学生を発掘し、NPO の活動経験を通して、市民活動を支える人材を育成すること。
運営組織	アクションポート横浜が事務局を担い、横浜市内および近隣地域に所在する <b>10 大学</b> （協力大学）が運営に協力。
受入団体	横浜市内および近隣を活動拠点とする NPO や市民活動団体、社会的企業・ <b>26 団体</b> 。
実習期間	短期： <b>10 日間</b> 前後、長期： <b>6 か月</b> 程度

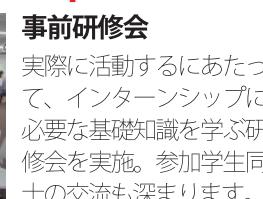


### ■プログラムの流れ

#### Step 1



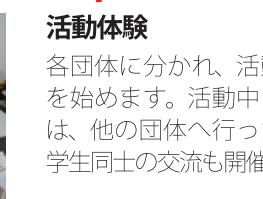
#### Step 2



#### Step 3



#### Step 4



#### Step 5



#### NPOと学生のお見合い会

参加学生と受け入れ団体が直接話すことができる機会です。様々な団体を見て、活動したい団体を選びます。

#### 志望先の調整 & 面接

実際に活動するにあたって、インターンシップに必要な基礎知識を学ぶ研修会を実施。参加学生同士の交流も深まります。

#### 修了式・成果報告会

活動してきた事を振り返り、活動内容を共有します。最後に修了書を受け取り、プログラムは終了です。

## 事例 青山学院大学 サービス・ラーニングパイロット科目 実施概要

科目的位置づけ	青山スタンダード（一般教養）「キャリア領域」の前期 2 単位科目 ※ 2 年生以上履修可
達成目標	現代社会が抱える地域課題や国際課題について、知識を得るだけではなく、実際にボランティア活動に参加して理解を深め、問題構造の分析や課題解決に向けた提案ができるようになること。
履修者情報	24 名（当初定員 20 名）
授業スケジュール	事前学習：4 月～5 月末（1～6 回） 実習期間：5 月末～6 月末（7～10 回）※総時間数は活動先による 事後学習：6 月末～7 月末（11～15 回）
実習先	横浜エリア：地球市民アクトかながわ、横浜 NGO ネットワーク、WE21 ジャパン、コトラボ合同会社 相模原エリア：多文化学習活動センター CEMLA、淵野辺つばめ塾、子ども食堂ちゃお！

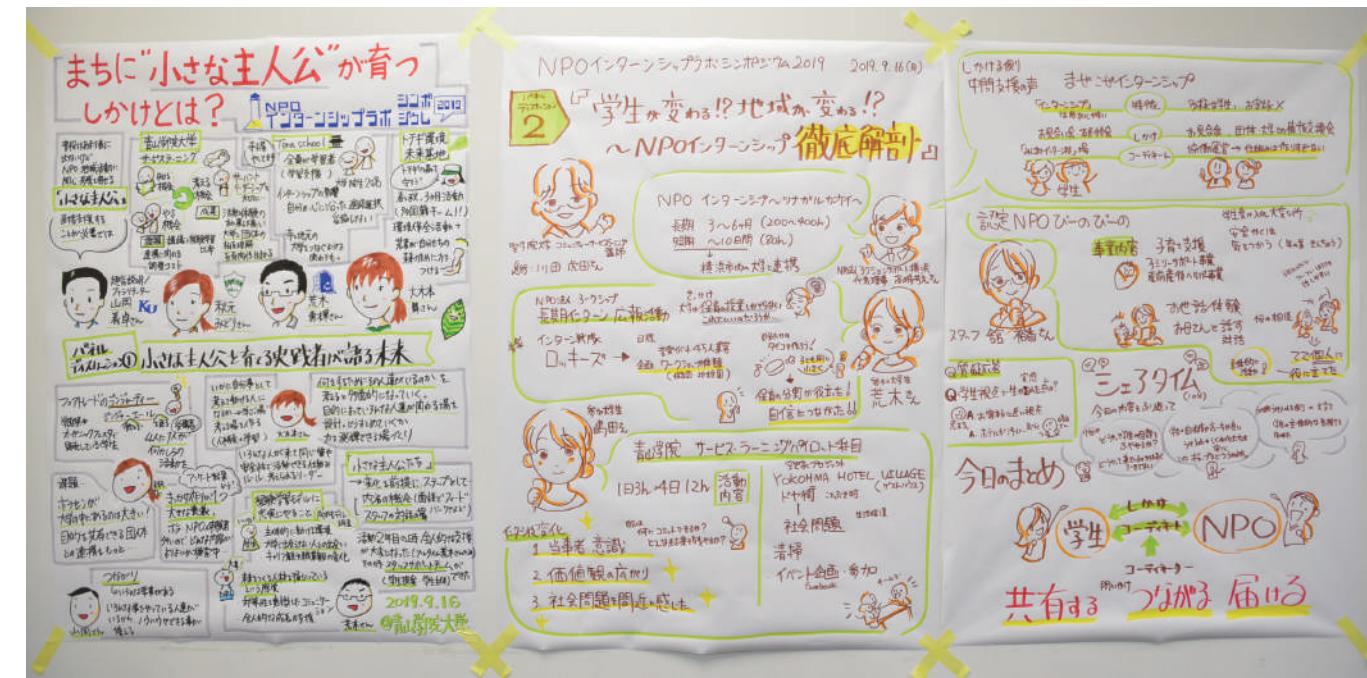
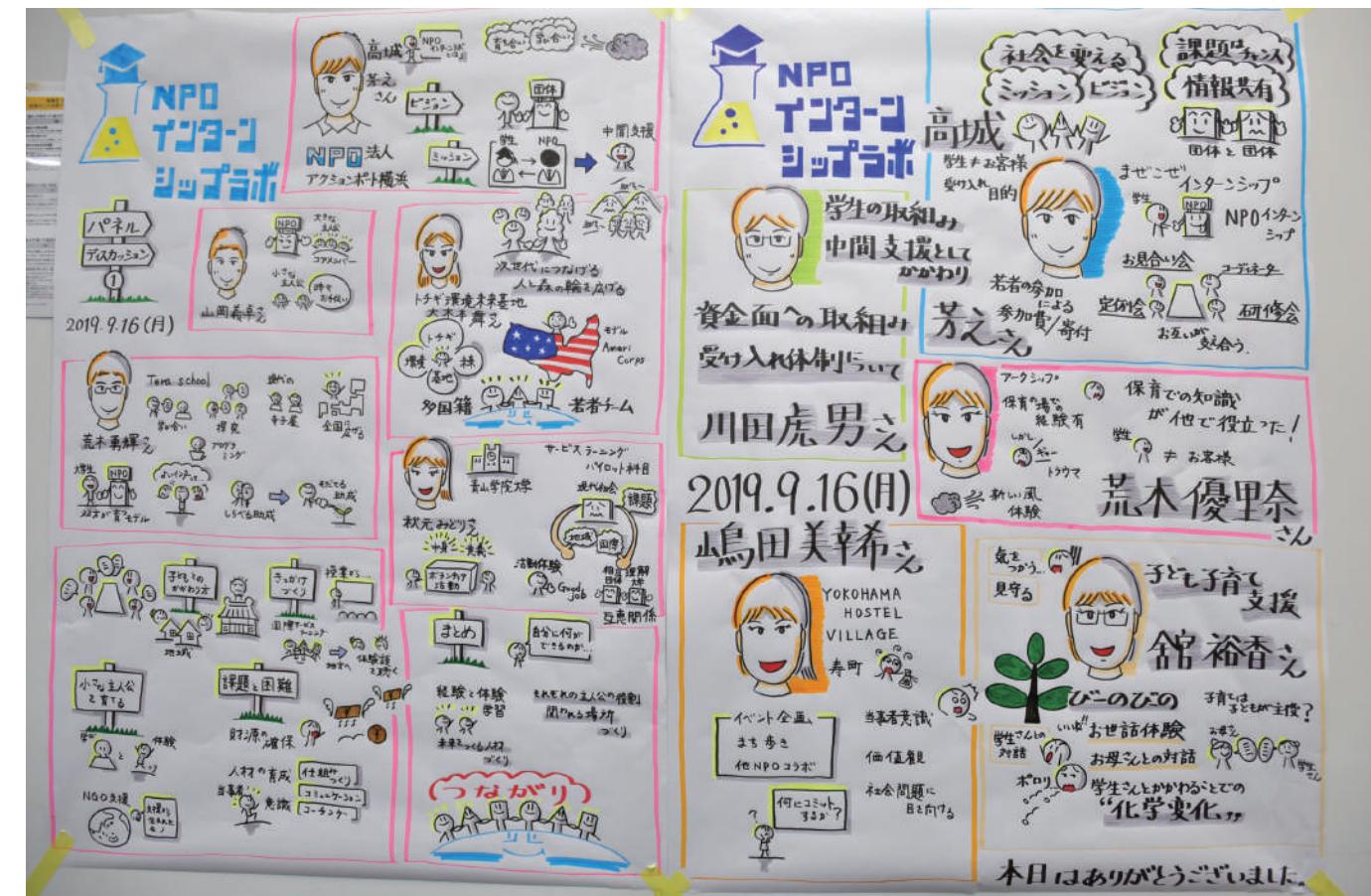
### ■プログラムの様子



## グラフィックレコーディング

当日、会場では大きな模造紙やホワイトボードを使って内容を見る化する「グラフィックレコーディング（通称：グラレコ）」の手法を用いて、フォーラムの内容を会場と共有していました。グラレコはteam 楽描の皆さんによって行われました。

(HPから拡大写真をご覧いただけます。<http://npointership-lab.net/>)



## まとめ

今回は「まちに“小さな主人公”が育つしきけとは？」というテーマでシンポジウムを開催しました。前半では「小さな主人公」が必要である背景から始まり、実践から活動の工夫や課題、そして未来について。後半は学生や受け入れ団体、中間支援団体それぞれの立場からのNPOインターンシップの成果や意義を共有する時間になりました。

今回のシンポジウムでは、地域や社会を先陣切って変革していくような、いわゆる「リーダー」や「イノベーター」と呼ばれる方々との対比で、それぞれのスタイルで生活しつつも、地域社会・NPO等の活動に興味・関心を持ち、できる範囲で、かつ主体的に行動していく存在を、「小さな主人公」と表現しました。

実際に現場を運営しているNPOにとってもこうした「小さな主人公」の存在は大事で、またそうした「小さな主人公」を育む取り組みは様々な現場で行われてきています。そして、その仕組みの一つとしてNPOインターンシップという取り組みも行われており、NPOと学生の双方に寄り添うコーディネーションが大事であることが確認できました。

「小さな主人公」が増え、市民参加で豊かな地域社会が作られていく未来。そのために一般的な若者（学生）がNPOに関わり、地域社会や社会課題に継続的にコミットできる環境を作っていくこと。NPOインターンシップはその手法の一つであると考えています。

そして、その成果は「NPOスタッフになる」「イノベーターが生まれる」ような、大きくわかりやすいものではなく、「寄付者やイベントボランティアになる」「自分の地域のお祭りに関わってみる」などの、小さなアクションかもしれません。

それは小さくて時間のかかる種まき活動です。ただ、こうした活動が続けることで、学生の想いと地域の団体の想いが重なり、活動が広がっていきます。NPOインターンシップは、若い世代が社会に関わりそのきっかけを作る種まき機能と、NPOに市民が参加し、社会を変えていくための参加促進機能の両方にアプローチすることができます。そしてそこには、学生とNPOが共に育ち合うためのコーディネーションがあってこそ、プログラムは成り立ちます。

NPOインターンシップラボではプログラムの価値をきちんと言語化し、そのコーディネーションの重要性も強く発信していきたいと思います。同時に、こうした種まき活動と共に地域で育んでいく仲間たちとつながっていき、学び合いの機会も作っていきます。

私たちはまだまだこれからの団体ですが、今後も幅広く活動していきたいので、ぜひともNPOインターンシップラボを応援してください！

最後に、このシンポジウムは共催の青山学院大学の皆様やご支援いただいたトヨタ財団の皆様はじめ、登壇いただいた皆様、参加くださった皆様、広報にご協力いただいた皆様、そして、NPOインターンシップラボの仲間の協力があって開催できました。本当にありがとうございました。

